早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

儀礼をめぐる情報の表象と編集

―強飯式の人類学的研究―

Representation and Rewriting of the Information on Rituals: An Anthropological Study of *Gohan-shiki*

２０１８年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

松田　俊介

MATSUDA,　Shunsuke

本研究は、栃木県の日光周域に広く分布する強飯式と総称される儀礼を対象とし、文化的慣行が、現代の地域的な事情を受けつつ、いかに情報的に作られているか、どのような広範な領域の事象とつながっているか、系統を同じくする儀礼同士がその複数性のなかにあって、いかに関与しあい共在しているかについて、追究していくものである。

第１章では、儀礼人類学の先行研究の検討とその課題の提示、強飯式についての先行研究への検討をおこなって、本研究の儀礼人類学・強飯式研究としての位置づけと志向を示した。強飯式とは、修験者等に扮した人物が、あらかじめ設定された「頂戴人」に対して米飯などの食物の大食いを強いる食責め儀礼であり、その奇抜な様式によって地域内外で人気を博している。注目すべきなのは、同じ日光山にて隆盛した日光修験を源流としていながら、儀礼の方法や大食の意味づけが、分布した地域によって大きく異なっており、それぞれ独自のローカル化が施されている点である。先行研究を受け、本研究では、人々がどのように行事の実際や意義内容を書き換えているかを、強飯式という多様な展開をみせる儀礼について、各地で実施したフィールドワークをもとに検討する。

第２章では、強飯式について、その来歴と各地域での実勢について検討し、強飯式という多様な形態をとる儀礼の系統理解を試みた。輪王寺強飯式でのフィールドワーク調査・文献調査の結果、強飯式という習俗は、元は日光開山以来より修験者がおこなってきた里の人々への食の振る舞いの行事だったものが、東照宮造営以後に現行のような激しい責めをともなうようになったものと推測される。それ以降、輪王寺が徳川の威信の発揚のために諸大名に向けておこなった行法が広く伝わったものと思われる。1975 年に実施された栃木県教育委員会による県全域での強飯式の悉皆調査では、調査時点で総数 84、現存 30 事例が確認されており、当時からすでに衰微がきわだっていたもようである。これを受け、2012 年から 2014 年にかけて筆者がおこなった追跡調査では、明確な現存が新設を含め９事例であり、庚申講やお天祭などにともなっておこなわれていたという慣行がほぼ確認できなくなっていた。休止・中止地域の関係者からは、高齢化や就業形態の変化、ノウハウの消失などの“実施の困難”が語られたが、これらは実施中の地域においても例外なく課題とされており、各儀礼の様式・運営に多様なかたちで意味づけられていることがわかる。

第３章では、栃木県日光市七里の生岡神社において、毎年 11 月 25 日に執り行われる強飯式の重要な一事例である「子供強飯式」を対象として、祝祭における逸脱的な食慣行を、先学の儀礼概念や消尽概念をふまえて、社会における食の文化的機能を焦点に分析した。子供強飯式では、子どもが修験者の立場になり、頂戴人となった自身の親へと激しく口上と食責めをおこなう。これを七里の人口動態とあわせて分析していくと、経済的画期（1955 年前後や 1990 年前後など）のたびに中心街からの集団転居の受け皿となってきた七里が、輪王寺より伝播した強飯式を、制裁型加入儀礼へと転化し、仲間入りの機会に活用するようになったと解釈できる。そのために、（七里においてさまざまな意味をもつ）里芋大食の実際の強制、五辛（彩膳の珍菜）の強制、責めのパフォーマンスなど、七

里独自のローカルな情報を多数用いて、脱規範的な機制を作り上げてきた。ここには、高位の者たちによって完結される正統な強飯式をただ模倣することをよしとせず、正統に対抗し、パラドクシカルな儀礼のなかに自分たちを介在させようとする七里住民の志向をみてとることもできる。

第４章では、栃木県鹿沼市上粕尾発光路において、毎年１月３日、恒例行事としておこなわれる「強力行事」を対象として、儀礼の転倒性・侵犯性を現代的／情報的な視座から分析した。強力行事は古法の色合いを最も強く伝承され続ける強飯式といわれ、国によって無形民俗文化財に指定されたが、補助金等をめぐる行政との対立が儀礼内容に含まれている。古くからこの地の大夫とよばれる役目の当屋行事として実施されていたが、そこには地域内の名士への一年の実績への評価（タナオロシ）の意味が含まれていた。現代においてはこれも大きく書き換えられ、儀礼の運営者が、市長を含めた行政役職者を頂戴人として招待し、「助成要請」「放射能被害対策要請」「通信インフラ整備要請」などの文脈を、ユーモアまじりながらも切実に責め口上に組み込み、低頭させている。これは当地の歴史的背景もあわせて考えれば、祝祭的な社会的立場逆転をはらむ、いわゆる儀礼的役割転倒（ritual role reversal）の一様態として読むことが可能であり、強力・山伏――山間に暮らす住民の象徴としての側面を色濃くもつローカルシンボル――という歴史的・異形的権威によって、政治的権威に対抗していると解釈できるだろう。

第５章では、栃木県栃木市家中地区の鷲宮神社において、新しく創設された神事・「強卵式」を事例とし、地域社会における食を伴う儀礼が、伝統的なものとして創造されていく過程を分析した。強卵式では、酒の痛飲と卵食禁忌を柱とする儀礼が行われており（創設年は 2001 年）、起案段階より宮司・神楽保存会・コンサルタントなど、多くのアクターが介在し、多様な指向性が統合されてきた。そのような交渉過程を経て、強烈な禁食（神社の神使である鳥とその卵）の戒めが設定され、それを即座に参観者に実践させる儀礼内容が、参与性の高い伝承装置として機能し、地域民俗を通じた参観者同士のコミュニケーションが紡がれていった。本来、この地の習俗を知る氏子だけではおそらく作り得なかったものであったが、外部者の異質な起案を基点に問題提起がなされ、結果的に自文化を再帰的に振り返りつつ律しようとする、民俗的な志向性とスペクタクル性とが両立された擬制的な儀礼が成立したのである。

最終章である第６章では、各地域の住民や関わる多くのアクターが、いかに自身の民俗の情報を解釈し（ないし読み換え）、書き換えてきたかを総括した。強飯式にみられた「分化」は、たんにそれぞれに独立した多様な様式を作り出しただけではない。儀礼の裏局域の複数性・せめぎあいが生成的な共在の構図をなし、各様式を活性化させる「文化の拮抗作用」ともよぶべき効果を生み出してきた。強飯式の各事例のように社会定着した地域儀礼には、ブラックボックス化された歴史性があり、それぞれが非常に動的・相互的な交渉過程を内包している。こうした過程で人々が行ってきた情報的な表象・編集の営為を再可視化することこそ、現代における儀礼人類学の要諦といえるだろう。